

細久手宿～御嵩宿 10km を歩く

5月3日の土曜日に、4月16日に引き続き細久手宿の西1kmほどから、御嵩宿までの10kmほどを歩きました。十三峠も越えたことから厳しい峠越えはなかろうと高をくくっていました、でも甘かったです。山合の中山道は桜の花が終り、つつじの花も盛りを過ぎて今回は藤の花が迎えてくれました。

塩尻行きの「ナイスホリデー木曾路」

今回はウイークデーの日程確保ができず、あえてゴールデンウイークの土曜日に計画しました。先回の状況も含め、中山道を歩く人がたくさんやってくるとは思えず、天気予報をにらみながら決めました。

東浦を7:33に乗り込み金山駅で中央線に乗り換えだが、ホームも通路も楽に歩くことができました。先回の混み具合とは雲泥の差があり、ラッシュ時の混雑は気の毒なかぎりだ。金山駅8:20の列車は快速塩尻行きである、土日のため近距離ではなく塩尻まで運転されるのかと思っていた。ところが列車が入線する時に流れた案内は「次の列車はナイスホリデー木曾路 塩尻行きです」という。後で調べてみると、JRの金山駅ダイヤ表には塩尻行きではなく、中津川行き快速と表示されている。それで気になりさらに調べてみたら、名古屋～塩尻を運転する臨時快速列車とある。この列車の前身はナイスホリデー妻籠・馬籠とかナイスホリデー赤沢森林で、平成7年にこれらが定期列車を延長運転する形で「ナイスホリデー木曾路」に吸収され、名古屋と塩尻間に設定された。当初は1両が指定席だったが、平成20年に指定席は廃止された。それと、この列車は大垣発の名古屋行き快速列車が、名古屋からそのままナイスホリデー木曾路として運転されるという。そのため列車は東海道線の快速と同じで6両編成だ、時間待ちしているときに先行した多治見行きなどは10両編成で運転されており、客が多いゴールデンウイークに運転されると言うには腑に落ちない。でも特別列車だと普通は特別料金が必要になるが、ナイスホリデーは不要である。要はJR東海とJR東にまたがる、長距離の運転を行楽シーズンに設定したものと分かった。

秋葉坂の三尊石窟

瑞浪駅 9:10 着、駅からタクシーで平岩辻まで移動して 9:40 に街道ウォーキングをスタートする。のどかな田んぼの広がる景色を眺めて、カーブする舗装道路を上っていく。細久手宿と御嵩宿の間は三里(約 11.8km)、県道 65 号はこのまま進むと花の木ゴルフ場に向かうが、ほんの少し上ると中山道は左へ分岐する。そこに「左中山道」の道標が立つ砂利道が続く、その向かいにも石碑があり「瑞浪市内旧仲仙道の影」と記されている。確認してみるとこの辺りの平岩辻、鴨ノ巣一里塚の地理地形やそこからの景色を説明しているようだ。その内容は、道が東西南北に向かっている珍しい所、旧鎌倉街道へ行く分岐点は日吉辻、一里塚付近の眺めは東に笠置山・恵那山、西に伊吹山・鈴鹿連峰、次は南ではなく北に木曾の御岳山・加賀の白山、そして南に濃尾平野の尾張富士、また快晴には尾張熱田の海が見える.....と説明されている。確かに県道 65 号と 366 号が十文字に交差しているのが「平岩辻」である、ということはこの説明のように日吉辻、一里塚が現れて、その先は御嵩に入っていくようだ。



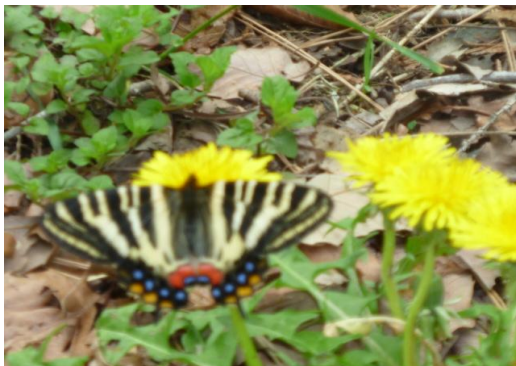
秋葉坂の三尊石窟

分岐から 2 分も行くと右側に石垣があり、少し高い所に石窟が三つ並んでいる。「秋葉坂の三尊石窟」で、中央に一面六臂(顔が一つで腕が 6 本)の観音坐像、右の石室には明和 5 年(1768)の三面六臂(顔が三つで腕が 6 本)の馬頭観音立像、左の石室には風化の進んだ石仏が安置されている。三面六臂とは三つの顔と 6 本の腕を持つことから、一人で何人ぶんかの働きをすること、また、一人で多方面にわたって活躍することを言う。言葉としては「三面六臂の働きをする」などと使う。

おそらく中山道のきつい峠道を行く馬と人の安全と、無事を祈って祀られたものだろうが、人用と馬用が並んでいるのは珍しい。そして、石窟のすぐ上には秋葉さんが祀られており、この坂は秋葉坂と呼ばれている。

新緑の小道にアゲハ蝶

秋葉坂の三尊石窟を越えて行くと、すぐに鴨ノ巣道の馬頭文字碑の案内がある。馬頭観音ではなく石碑だけが少し離れた杉木立の中に立っていた。急坂が終り地道となり、枯葉がたくさん落ちている道にはタンポポの花がきれいだった。そのタンポポに蝶が留まっているのを友が見つけカメラを向けた、私もあわててカメラを向けシャッターを押した。再度撮り直しをしようと構えたら、蝶は飛んでいってしまった。先回はギフ蝶の調査をしている少年たちに出会ったが、あれはアゲハ蝶だったと思う。写真は蝶が羽を広げている後ろから撮ったのでしっかり撮れたのだが、あわてたので半押しが確実ではなかったようでピントが少し甘かったようだ。



たんぽぽにアゲハ蝶



緑のシャワーといったところ

そこから 10 分も行くと先ほどの説明にあった旧鎌倉街道への分岐で、そこには鴨ノ巣の道祖神碑があった。この辺りは緑の林の中を行くが、道幅は広く所々に枝道があり個人の私有地もあるようだ。バブル期に別荘開発がすすめられたのであろう。落ち葉を踏みしめ、新緑のトンネルをゆく気分はとても壮快な気分である。初夏の新緑と秋の紅葉を比較した時に、新緑は若さ、元気さ、はつらさなどのように勢いを感じる。その意味からも私は新緑が好きである。もっとも秋になれば、同じように秋の良さを感じ入ると思う。道端にはワラビも顔を出しており、今回も家内はワラビ採りに精を出していた。

左右の塚が離れている鴨ノ巣一里塚

旧鎌倉街道への分岐から 5.6 分行くと、「瑞浪市内旧仲仙道の影」に載っていた「切ら

れヶ洞」の碑があった。でも説明はなく何のことか分からなかったが、誰かがここで切られたということか。しかし、その石碑は昭和 49 年と新しかった。まだまだ続く新緑の道を進むと、お椀のようにこんもりと土の盛り上がった一里塚らしきものが見えてきた。江戸へ 93 里、京へ 41 里の鴨ノ巣一里塚で、この一里塚は地形上北側の塚が 16m ほど東にずらされているのが特徴であると記されている。そして、ここからは鈴鹿、伊吹や北アルプスの山々が一望できると記されているが、木が生い茂り周りの景色は何も見えない。せめて昔はと付け加えてほしいものだ。



鴨ノ巣一里塚

今回のメインポイントになるので記念写真を撮って先へ進む、ここから御嵩町に入りまだまだ新緑のトンネルが続き 10 分程行くと、今度は竹林に変わった。そして石窟がありここにも馬頭観音が祀られていた。そこから道は下りになり小さな黄色の花(あとで調べるとウマノアシガタらしい)が咲き、かわいらしい花だと話していると、すぐ先でも水の流れるところにかたまって咲いていた。そこから直に案内標識があり「津橋まで 1km」とあった。

47 世帯の集落 津橋

道は下りが続き集落が見えてくると、右側に立派な石垣が現れた。そこに石碑が立ち「山内嘉助屋敷跡」とある、お城を思わせるような石垣のみが残っている。そこには説明がなく、帰ってから調べると江戸時代に酒造業を営んでいた豪商らしい。そこから少し行くと小川を渡り津橋の集落へ入る、その時私たちと同じ年代くらいの夫婦がリュック

姿で歩いてくるのに初めて出会った。



ウマノアシガタ



山内嘉助屋敷跡

津橋には立派なトイレも設置されていて、利用した友の言うのには町が作ったのではなく、東海自然歩道の整備の一環として造られたもの。そこから少し行くとまた小川を渡るが、田んぼが広がり大きな岩がころがっているのが目に入る、農家の庭先には山吹の花がきれいに咲いていた。その先が御嵩町津橋の公民館で、掲示板に津橋は海拔256m・世帯数人口47世帯 平成26年4月1日現在。隣には津川雅彦のいかつい顔写真を使った「拉致 必ず取り戻す」のポスターが張られていた。公民館から3分程行くとかなり大きな十字の交差点に出た。その角に「中山道 至御殿場」の石柱が立っていた、ここからはきつい坂道になりそうなので小休止することに。そこは「ふれあいバス 津橋県道交差点前」のバス停で、一日に4本運行されていた。隣に自販機もあったのでこれ幸いとコーヒータイムにした。

山の中も開墾して増産したが...

御嵩宿はすでに散策しており、その時に御殿場まで足を延ばして東屋で弁当を食べたのを覚えている。5分ほど休憩してその御殿場をめざし坂道を登って行く、直に石碑が一つあったが文字は読めなかった。そして、辺りが見渡せる高台の道に出ると、一軒の大きな草屋根の家があった。もっとも今はブリキで屋根は覆われていた。日当たりのよい大きな家の前の道からは、緑の山に囲まれて農地と家が点々と建つ風景が広がっている。大きな民家の先からは緑の林の道になり、頭上にはやさしい紫色の藤の花が咲き誇っていた。その先でも馬頭観音が祀られていた、そこから少し坂道を上ると立派な石碑

があった。表面は「若鷲碑」裏面には「整田碑」とある、若鷲碑と言うからには戦争にかかわるものと思うが、こんな山の中に何故あるのか。碑は少し離れて高いところにあったことと、向きが少し斜めのため文字面がはっきり確認できなかった。でも、佐賀源一と言う名前と、無事帰還できたおかげと感謝...の文字は確認できた。

そして、裏面には昭和 55 年ころから全部で三十余の田圃を五つに集約、どの田も排水をして車が入れるようにした。その排水を利用してイワナ、アマゴ、ヤマメを養殖。さらに柿、梅を植えて鶏・鴨を飼った、全部で一千三百万円かけて完成。特攻で戦死したことを思い、土地改良で食料の確保に努めた.....とある。つまり、佐賀源一さんが特攻で戦死したと思って、全財産を投じて食糧増産のために行ったものらしい。碑から少し行くと、整理して大きくなった田んぼが広がっているのが見えた。



津橋県道交差点前



表面は「若鷲碑」裏面には「整田碑」

御殿場でランチとコーヒータイム

整田碑から 8 分程行くと馬の水飲み場があり、御殿場に到着した。この辺りは物見峠と言い 5 軒の茶屋があり、馬の水飲み場が 3 ケ所あった。十三峠の前後の地であり馬もさぞかし喉が渴いたであろうと設けられた。御殿場の名前は文久元年(1861)皇女和宮の行列が十四代將軍徳川家茂公に輿入れした際、ここで休憩する御殿が作られたことに由来する。行列は前日に宿泊した太田宿を朝出発して昼には御嵩宿で休憩、そしてここ御殿場でも再び休憩し大湫宿で宿泊した。何せ行列は 4,000 人から 5,000 人ともいわれる大行列だったという。

高台の東屋で弁当にした、北に御岳山、東に恵那山が展望できるというパネルが設置されているが、木々が茂りまるで展望は利かない。展望が利く程度に木を切っても良い

と思うのだが、これでは東屋の意味が半減してしまう。食事のあとは隣にある「ラ・フロヴンス」という洒落たお店に立ち寄りコーヒータイムにした。でもかなり混雑しており順番待ちに、5番目だったがどのくらい待たせようか。しかし、バラや草花の広い庭とギャラリーまであり退屈はしなかった。日当たりも良く心地よい風も吹いていた。お店はケーキとハーブが売りのお店、順番になり席は屋外のデッキにしてコーヒーを頼んだ。ケーキや生菓子の好きな友の細君がコーヒーだけにしたので意外だったが、コーヒーには小さなケーキが添えられておりラッキーだった。



御殿場の案内と入り口



「ラ・フロヴンス」という洒落たお店

食事とコーヒーのランチタイムは1時間ほどだった、ここから御高駅までは4kmほどはあるのもう少し頑張らなくては.....

「唄清水」「一呑の清水」「十本木立て場跡」「謡坂十本木一里塚跡」

ラ・フロヴンスのお店からは下り坂で、8分程行くと「唄清水」に着く。小さな水場で傍らに「馬子うたの 響きに波立つ 清水かな 五歩」ときざまれた嘉永7年(1854)の句碑がひっそりとたたずんでいる。そのさきは竹林が続く道を行くと、突然前が明るくなるほど鮮やかな赤い小さな花がいっぱい咲いた木を見つけた。かなり大きな木だが、つつじのようである。周りが緑の中で一段と映える色は、人の目をひきつける存在に圧倒される。そのすぐ近くに「一呑の清水」がある、旅人用が上に、牛馬用が下に造られている。皇女和宮がこの水を賞味されたところ、大変気に入って後に永保寺(多治見市)に滞在のおり、わざわざこの「一呑の清水」を取り寄せて天茶されたとか。山の中の街道で

は水が貴重であり、水飲み場はいずれも大切に守られてきたのであろう。



満開のつつじ



一呑の清水

そこから直に「十本木立て場跡」がある、宝暦5年(1756)刊の「岐蘇路安見絵図」にも記載があるこの立て場は、籠や荷物をおろして休憩したところからしだいに茶屋などが設けられ、旅人の休憩場として発展した。一方古老の話として、参勤交代の諸大名が通行するときには、ここに警護の武士が駐屯して一般の通行人の行動に注意を払ったと言う。今は何もない立て場跡から4分程行くと、道が右に曲がりながら少し下っていく。その曲がる所が少し高くなっていて、「謡坂十本木一里塚跡」の立派な説明碑がある。それによると、この塚は明治41年に2円50銭で払い下げられ、その後取り壊されました。今の一里塚は昭和48年に地元有志の手で、かつての一里塚近くに復元されたものです。これが一里塚と言われないと気がつかないくらいですが、復元されたことは喜ばしい限りです。

浮世絵モデルの地と「うたうさか」

謡坂十本木一里塚跡のすぐ先に今度は歴史の道中山道の説明板がある、それによるとこの地は、安藤広重の浮世絵「木曾海道六十九次之内 御嵩」のモデルとなった場所と推定されると記されている。広重は御嵩の情景に「木賃宿」を取り上げ、囲炉裏を囲んで談笑する旅のひとこまをモチーフとして描いたのかもしれませんが。広重の作品に木賃宿が登場するのも珍しく、軒下にいる二羽の鶏も作品に描かれることはごく稀だという。ここが本当にその場所なのかどうかは問題ではなく、江戸時代の情景をほうふつとさせることに意味があるのだろう。でも、御嵩宿はここからずうっと先にあり、ここを絵のモ

デル地とすると広重は見ていない御嵩宿を想像で描いたことになる。

中山道の説明板から3分程行くと謡坂の石畳がある、この謡坂の由来は京から江戸へ向かう旅人は、この辺りから続く坂道に息を切らせました。そこで苦しさを紛らわせるために歌を歌いながら坂を上ったことから、「うたうさか」から「うとうざか」という地名になったのではないかと伝えられています。

御嵩には隠れキリシタンがいた

石畳を少し行くと「マリア像・トイレ」はこちらの案内がある。石畳をそれて木立の中へ入ると、畑がありその向こうには農地が広がっている。次の案内で右に曲がると聖母マリア像が立っている。一度訪れたが再度訪ねトイレを借りた、そこは広い道路に面して休憩場も併設されていた。



聖母マリア像



謡坂の石畳

御嵩町に隠れキリシタンが存在したことは、昭和56年(1981)この地で町道の拡張工事をした際に、自然石を少し加工しただけの「陰刻十字架」など三点の遺物が発見されたことで顕在化しました。隣の可児市の塩地地区を中心に隠れキリシタンが見つかり処刑されたということは知られていました。でも御嵩町にはそれらしい伝承も記録もなかったのです、発見された場所は「七御前」と呼ばれる仏教関係の石碑が集められていた所。その後、小原地区を中心に、十字架、聖母マリア像などが発見されました。

いただいたパンフレットには以下のような記載があります。キリシタン信仰が誰によっていつごろ、どのようにしてこの地に入ってきたのかは全く記録がありません。一説

には戦国時代、この地区に小原城と言う小さな城があり、その城主がキリシタンではなかったかと言われています。この小原城主であった人物は小倉織部です。小倉家はこの小原村の大地主でした、当主であった小倉本助は天明・寛政年間(1781~1801)に所有していた土地と家財をすべて村民に分与し、巡礼の旅に出てしまい、小倉家は途絶えてしまったと言います。何故旅に出たのか不明ですが、小倉家の墓には逆卍が彫られた墓碑が残っていることなどから、小倉家が隠れキリシタンであったのではないかと、言う可能性がうかがわれます。

こうしたことから御嵩町観光協会の発案により、当時の辛苦に耐えた先祖の慰霊の意味と、今後の人々の幸福と平和を祈ってマリア像を建立したとあります。

周りと調和しない家

マリア像から石畳に戻り 5 分程行くと、道路沿いの崖にへばりつくように耳神社がある。「耳神社」のノボリ旗が並び説明板もある。全国的にも珍しい耳の病気にご利益があるといわれる神社です。それによると、病気が治るように願をかけ、お供えしてある錐を耳に当てます。病気が全壊したらその人の年の数だけ錐をお供えしました。でも、なぜ錐を耳にあてるのかの説明はありませんでした。



耳神社



農村の風景と釣り合わない家

耳神社から坂を下っていくと少し開けた農地があり、屋根が何層にもなったとても立派な和風の家があった。でも、立派な家の手前から道がゆるくカーブする所には今風のしゃれた形の家が建ち、なんともいただけない。このすばらしい農村の風景を壊してしまっているのです。少なくとも私にはそのように見えました、個人がどのような家を建

てるかは、他人が干渉することはできませんが、この風景自体がこの村の財産であると思います。村人が村の財産を守るために協力する、あるいは努力することがあっていいと思いました。

牛の鼻欠け坂

そんな思いで歩いて行くとあぜ道を子供たちが走ってきました、その姿さえが農村の美しい風景に見えてきました。そこからは上り坂になり、いきなり大きな石碑が現れました。それは「百八十八ヶ所順拝納経塚」と彫られており、あちこちお参りした記念碑のようです。そこから坂は急になり、ゆっくり歩を進めて4分ほど行くと右手に石を積み上げた立派な石室があり、観音像が祀られています。「寒念仏供養塔」で、ここは中山道の難所「牛の鼻欠け坂」と呼ばれており、道中の安全を祈って祀られているのであろう。観音像のすぐ先、下りのヘアペンカーブのところに牛の鼻欠け坂の説明板が設置されていた。それによれば、牛や馬の鼻が欠けるほど急な坂道であったことから名づけられたという。「今も地元には『牛坊 牛坊 どこで鼻欠いた 西洞の坂で鼻欠いた』という唄が伝えられています」と記されていた。



牛の鼻欠け坂の説明



右御嵩宿 3,500m の道標

中山道全線を通して、この辺りが江戸へ向かう東は山間地域の入口となり、京へ向かう西は比較的平たん地になる。つまり、この辺りが山間地と平たん地の境界線になっているという。説明板から3分ほどで牛の鼻欠け坂を下り、農地が広がるT時路にぶつかる所に「右御嵩宿 3,500m、左細久手宿 8,300m」の道標が立っている。やっと上り下りの坂をクリアーしたと思ったのに、まだ3,500mもあるとは.....。

田んぼの中にソーラパネル

道標を見て左へ行くと、すぐそこに石像がある。お地蔵さんではなく、手が6本で顔が三つの三面六臂の馬頭観音立像だった。秋葉坂の石窟ではしっかり見てこなかったが、像の横には「文化十三子」の文字がある。6本の手は一番下の手が前で両手を合わせているが、一番上の両手には刀らしきものが握られている。それに対し真ん中の手は何も持っていない、左右に広げている。おそらくこの分岐は重要なので観音様を安置するのに、一体だけでは大変だろうからと三面六臂の馬頭観音さんを祀ったものと思う。



そこから 10 分ほど行くと田んぼの周りに集落が連なっている。しばらく行くと、田んぼの中にソーラパネルがずらりと並んでいた。発電は重要なことだがそれにも増して、農業は食の確保のためこれまでもいろいろな施策が講じられ、税金もたくさん投入されてきた。そうして維持してきた田んぼをつぶしてまでソーラパネルは必要なのだろうか。

パネルを設置したことで周りの田んぼを分断しており、大規模化を阻み田んぼに使うお金が有効に使われているとは思えない。ソーラパネルはもっと別な土地を有効利用する方がよい。これら農地転用の許可権は農業委員会にあり、地方の行政権との兼ね合いで問題が指摘されている。減反したらお金がもらえると言う馬鹿げたやり方は一日も早く改めるべきで、土地利用の原則は自治体が責任を持ってあたるべきであると思う。

和泉式部の廟所

ソーラパネルの所からすぐに国道 21 号に出る、右折すると目の前に「和泉式部廟所」の案内がある。国道から 10m も入ると瓦屋根の祠があり、中に「いづみ式部廟所」と彫られた立派な石碑がある。平安時代を代表する女流文学者の一人といわれ、和歌をこよなく愛して数多くの歌を残した。一方、恋多き女性としても知られ、波乱にとんだ人生を歩んだ彼女は心の趣くままに東山道を旅し、御嵩辺りで病に倒れる。鬼岩温泉で湯治していましたが、寛仁 3 年(1019)とうとうこの地で没したとされています。碑には「ひとりさえ 渡ればしずむ うきはしに あとなる人は しばしとどまれ」という歌が刻

まれています。田んぼの脇にひっそりと建つ祠は、周りの囲いはなく瓦屋根を支える柱のみが際立って、どこかさみしげであった。



和泉式部の廟所



御嵩宿の通り

和泉式部の廟所から国道 21 号をもくもくと 20 分程歩く、御嵩駅 14:29 の電車に乗りたいたものと少し急いだ。宿場への道に入ると御嵩公民館の前を通って、さらに 10 分弱で商家竹屋、本陣、中山道みたけ館前に到着する。ここは以前に見学したので今回はパスして駅に向かう。唐沢橋を渡ると大寺山願興寺の前を通る、天台宗の古刹で本堂は国の重文、鐘楼門は県重文。この辺りでは「蟹薬師」とか「可児大寺」と呼ばれ、広く親しまれているという。ここまで来ると御嵩駅は目の前で駅に 14:20 着、やっと一息つくことができた。

今回のウォーキングで草津宿～妻籠宿まで歩き通すことができた、この先木曾路は電車の本数も少なく、時間的に一日で歩くことが可能かどうかきっちり調べてから計画するつもり。